

在日二世青年¹⁾たちの語る歴史

——林茂澤，文京洙の1970年代をうかがう

許 智香

要 約

This paper is a record of interviews with Im Mutaek (林茂澤) and Mun Gyeongsu (文京洙) on their experiences as second generation Zainichi Korean (在日二世) in Japan during the 1970s. Research on Zainichi Koreans has always been an aspect of the movement. Accordingly, I have comprised the through the analysis of the movement's activities during the 1970's. The paper includes additional explanations of related cases, organizations, and people who are mentioned in the interview.

キーワード：朝青同，韓青同，マルキスト，国籍問題，コリアン社会，政治の物語と身体，二世たちの生きること

Keywords : ChoChongDong (朝青同), Han ChongDong (韓青同), Marxists, Nationality issues, Zainichi society, Political Narratives and Bodies, the lives of the Zainichi Korean II

I はじめに

在日朝鮮人運動史研究に関しては²⁾，これまでいくつかの整理がなされている³⁾。そのなかで手堅い研究成果については，研究史整理および最新の著作に参照されている研究文献に譲る⁴⁾。なお，本インタビューと関連し，在日二世当事者の実際の生と体験に注目した聞き取りやインタビューもこれまで多く行われてきた⁵⁾。本インタビューは，これまで活字化されてきた在日二世の「語る歴史」に位置付けられる⁶⁾。大門は、『語る歴史，聞く歴史』において，自分が経験した聞き取り調査を例に上げながら文字が普及しても「語ること」「人に話を聞くこと」が人間の生活世界に成してきた意味を強調する。時間が過ぎてもよみがえってくる声の前で，文字としては到底表現しきれない小作農民の窮乏した1930年代の様子が脳裏にささるといふ⁷⁾。本稿で取り上げる在日二世たちの1970年代に関していえば，戦後日本の政策と在日運動史に焦点を当てた膨大な文字資料が出されている。だが，当時を経験したことのない若い世代にとってそれらの文献資料は，ときには事件の連続や硬直した団体名として受け入れられることもある。本インタビューは，1970年代を生きた在日二世の経験に直接耳を向けることで，文献資料に生気を吹き込む一方，時代を超えた，人間の普遍性のようなものに近づきたいという欲望から生まれた。そのため，インタビュー方法に関しても，あらかじめ質問項目を細かく決めたり具体

的な項目を聞いたりするのではなく、その人の「人生を聞く」ように努めた。また、インタビューは、2023年1月5日（木）に立命館大学衣笠キャンパス、コリア研究センターの事務室で行われたことを記しておく。

以下、インタビューに応じてくれた二人の略歴を紹介するとともに本稿の趣旨を簡単に述べておく（以下、敬語省略。事実の詳細な背景については本文を参照されたい）。

①林茂澤は1944年に疎開先の福井県で5女2男の7人兄弟の6番目として生まれた。父親は植民地朝鮮の慶尚南道晋州郡美川面で生まれ、16歳頃に単身で日本に渡り、京都駅裏南口の「朝鮮部落」に定住した在日一世である。林は日本の学校に通い、1963～1964年頃に高校を卒業、浪人した末に、周囲から「手に職をつけたらめしは食える」といわれて建築専門学校に入るが、半年も満たないうちにやめる。1966年頃に在日韓国青年同盟（韓青同）と出会い、1970年代半ばまで活動した。運動に矛盾を抱きながら生業として薬屋を経営。1999年には韓国延世大学校史学科に留学し、その後は立命館大学の非常勤講師を務めた⁸⁾。

②文京洙は、1950年に岩手県で生まれた。1913年生まれの子の父親は10代半ばに大阪に渡って活字拾いの職工となった人で、結婚をしたあと解放の時まで大阪で暮らしたが、解放とともに故郷である済州島に一度帰る。だが、やはり生活できずに1946年には再び日本に戻り、母親もその翌年、3人の子を済州島の外祖母に委ねて大阪に戻る。一時期に食い扶持を求めて岩手県まで渡った際に文が生まれたという⁹⁾。朝鮮学校を通ったので定時制で日本の高校に編入、その時期2年ぐらい朝青で活動する。1971年に法政大の夜間部に入学、卒業後1975年に中央大法学会に学士入学、同大卒業（77年）後、再び法政大の大学院に進学するまで、1970年代はフリータ生活の始まりだった。一方で朝鮮学校を出たこともあり、留学同に出入りする。非常勤講師などを経て1989年から1991年までは国際基督教大学常勤助手として勤務、1994年に立命館大学に赴任した。

本稿は、以上の二人に在日二世の1970年代についてうかがい、それを記録したものである。1970年代というのは、植民地朝鮮から「内地」に渡り、日本に定住していた両親のもとで生まれた二世たちが、学齢期を経て、20代から30代ぐらいの大人になる時期である。

一方、「大東亜共栄圏」を唱えていた帝国日本が「小国単一民族国家」として、米国の主導する冷戦体制に奉仕しながら、大韓民国の極端な「反共」政策の仲間として歩調を合わせはじめたのもこの時期である。「大韓民国政府は朝鮮にある唯一の合法的な政府である」（「韓国との基本関係条約」第3条）と、北朝鮮を排除した形で、経済一辺倒に韓国と日本が国交正常化を進めたのが、1965年であった。その後、韓国の反共一独裁政権は朴正熙の維新体制に入る一方、北朝鮮では政治的硬直化が顕著になっていく。そのなかで二世たちは、民主化による民族統一の希望を持ちつづける一方で、日常的には「日立就職差別裁判」事件（1970）のような閉鎖的な戦後日本社会との闘争に身と心をおきながら、同時に自分たちの毎日を生きなければならなかった。そのような現実を、大人として自立し始めた、当時の二世たちはいかに暮らしていたのだろうか。在日朝鮮人運動史に登場する多くの団体や事件、合同や分裂、あるいはそれぞれの展望を、身近なものとして書き残すため、以下では、二人の「語る歴史」を記録しておきたい。

なお、ハングル音読みを含め、出来るだけ二人の口語を生かすように努めた。意味を補充する必要がある場合、[]で補う。国の名称に関しても「朝鮮民主主義人民共和国」と「大韓民国」

が正式名称であるが、多様な略称をそのまま記しておく。登場する事件、団体などについては、国際高麗学会日本支部編『在日コリアン辞典』（第2刷、明石書店、2012年）の該当項目を参考した。

最後に、録音した肉声を書き起こした後に、対象者の閲読を経たことを記しておく。

Ⅱ インタビュー本文

1 文京洙の大学進学と林茂澤の韓青同

許智香 今回のインタビューの主題は、在日二世の1970年代です。70年代って、先生たちが大人として自立し始めた時期じゃないですか。お二人の年齢から確認させてください。

林茂澤 私が1944年生まれで文京洙より6歳上。(1970年当時→林：26歳、文：20歳)

許智香 文京洙先生は、ほぼ70年代全体が大学生時代だったんですね。

文京洙 はい、私は、69年に朝校[朝鮮学校]を出て、朝校を卒業したのかしてないのか、ちょっとはっきりしない。日本の駿台高等学校っていうところの4年に編入したのだけれど。編入は2年までの、だから、3年に在学しているっていう証明があればいけたので、卒業証書がなくても編入できたので正直いうと、朝校をちゃんと出たのかどうかははっきりしない。で、69年度は1年間定時制に通って、定時制の時期を含めて法政に行くまでは2年ぐらいはチョジョン[朝青]の活動をしている。総連の、朝鮮青年同盟¹⁰⁾。

許智香 先生、活動してたんですね。

文京洙 朝青の真土班っていうのがあって、これは総連の組織体系でいうと荒川支部の真土分会になるのだけれど朝青の場合は、班と言った。班というのは日本でいうと町ぐらいの単位。一応そのパンジャン[班長]を2年ぐらいしてたかな。

林茂澤 班長を？朝青の？

文京洙 はい、チョニム[専任]つまり専従の活動家になるように周囲からかなり働きかけがあって迷っていたのだけれど、結局、組織人になるのは性格的にも無理なような気がして、やっぱりやめた。高校を出たときから大学に行こうと思っていたから、入試の1、2ヶ月前から受験勉強をまた始めて、1971年に法政大学の夜間部の英文科に入った。簡単に略歴でいうと、71年から75年か、75年3月の卒業で。それで、それ卒業してもあんまりいくところがないから、学士入学っていうのを。それで中央大学の法学部の政治学科に入って、そこで2年間やって、卒業して、それからまた法政の大学院。だから、ずっと大学生活。ただ、大学生活といっても中身はフリーターみたいなもんだから。

許智香 フリーター？

文京洙 だから、家庭教師だとか、塾とか、喫茶店のホールをやったのが長かった。喫茶店のカウンターで珈琲はもちろんサンドイッチとかスバゲッティを作っていた。三河島に近い日暮里・上野・御徒町辺りにはハングッサラム[韓国の人]が結構そうい

うお店をやっていた。バイト先には不自由しなかった。

林茂澤

ウェイター。

文京洙

ウェイターと、あと、中に入ってやる、あれ、何ていったっけ、

許智香

キッチンの補助みたいな？

文京洙

言い方があるんだよ、厨房のなかのカウンターっていったと思う、ずっと。それを日暮里だとか、新橋では2、3年務めた。そういうとこでずっとアルバイトをやるんだ。もちろん、学費とか、そんなのはみんな自分でまかなってやっている時代だから、みんなそうだったけども。学費も安かった、当時。法政なんか3万円ぐらいで入れたかな。

許智香

入学するときに3万円？

文京洙

入学金と、6カ月分の授業料で3万円ぐらい払ったと思う。80年代過ぎてから急激に学費が上がってきた。学費上がると、貧しい子はほとんど大学にいけないぐらいになってくるんじゃないかな。

許智香

文京洙先生はその70年代、大学ではどんな活動をされたのですか？

文京洙

大学では朝文研。朝文研っていうのは朝鮮文化研究会¹¹⁾っていうのがあって、今、研究者とか市民運動などいろんな活動をしている人は、ほとんど朝文研とか、大学でそういう活動していた人が多い。朝文研と、韓文研、韓国文化研究会¹²⁾っていうのがあって、朝文研ってのはユハドン [留学同¹³⁾]、事実上ね。ただ、法政はちょっと違ってただけだね。全国的には留学同っていうのは、要するにユハクセン [留学生] っていうはおかしいんだけども、一応、総連の傘下組織、大学生の組織で、在日朝鮮留学生同盟 [留学同] があって、その大学での表看板が朝鮮文化研究会、朝文研って言っていた。朝青の仕事を少しやりながら、主に大学へ行ってからは、朝文研の活動をしていた。京都も留学同が強い。今はどうかかわからないけども。昔は強かったよね。

許智香

尹健次先生の本に出てくる留学同ですね¹⁴⁾。

文京洙

そうそう。全国的には早稲田とか法政とか中央とか、そういうところ。みんな留学同が強かった¹⁵⁾。一方で、林先生は韓国青年同盟¹⁶⁾で、韓国学生同盟¹⁷⁾ってのがまた別にあって。

林茂澤

でも、だいたい、その頃は韓国学生同盟もほとんどいわゆる民団社会のなかでの青年、あるいは学生の運動っていうところから完全に離れた状態だった。だから、僕が韓青同で活動していたときには民団社会、総連と民団という両方の、片方のなかでの青年運動という位置づけがはっきりしていたんですよ。

だから、72年が7・4でしょう¹⁸⁾。7・4を前後にして、つまり、学生同盟も青年同盟も、民団社会という一つの同胞の世界から完全に弾き飛ばされるんです。だから、それ以降の学生同盟とか青年同盟っていうのは意味合いが全く違うわけです。つまり、在日のなかで在日の運動をするっていう立場ではなくって、完全に浮いた状態で、同胞とは、ほとんどもう切れた段階で、自分たちの世界のなかで何かしようという少数の人間が集まるといって、つまり、同胞社会のなかでの位置づけか

らは完全にはずれてしまう。

文京洙 何かしようっていうのは、要するに、72年から維新体制¹⁹⁾じゃない？だから軍事政権、独裁政権に反対して、祖国の統一、つまり、完全に本国志向になっていく²⁰⁾。韓学同はね。

許智香 韓青同もそうですね。

文京洙 韓青同もそう。だから、(民団組織から)締め出される。72年にね。

林茂澤 出るのは、72年の7月に傘下団体を取り消されるんですよ。それが72年の7月です。

許智香 本国志向っていうのは、でも、民団も同じじゃないですか。

林茂澤 民団は軍事政権の言いなりだから。

許智香 その本国志向の本国って何ですか。

文京洙 韓国民主化。簡単にいうと当時の分断と独裁政権に反対して民主化や統一を目指しているという志向。

2 朝文研も韓文研もマルキスト

林茂澤 それも複雑で、それを主導していった勢力ってのはマルキストなんです。だから、権力側からベトコン、ベトコンって言われてたんですよ。ベトナムで、南のベトコンがあるわけじゃない？だから、韓国という南にしながら北を志向すると。共産化をよしとするという立場。ベトコンっていうのはそうでしょう？南ベトナムの解放戦線ってのは。そういうふうには権力側も位置づけていたし、運動側の一部も自らそういうふうには思ってたんです。

文京洙 当時、学士入学して中央大に入ったら、朝文研の部室があるんだけど、特に使ってなくて、そこに韓学同の在日学生が占拠していたわけ。で、韓学同の人たちを出ていってもらって、朝文研をまた始めて、そのときに高二三っていう新幹社の社長なんかがいる、韓学同と部屋をめぐるって争っていたんだけど、飲みに行ったりすると、どういう話になるかっていうと、「おまえはドイツイデオロギーを読んだか」とかね。共産党宣言なんか当たり前なんだ、そんなの当たり前でさ、そういう話になる。だから、マルクス主義をどちらがよく知っているかみたいな、それで論争になるわけ。あの時代はそのぐらい韓学同も左だったんだね。

林茂澤 この小説²¹⁾を読めばわかるんだけど、韓民統²²⁾の責任者が来て、毛沢東の『実践論』『矛盾論』を韓青同の幹部と一緒に学習する場面が出てきます。それは実際にあった場面。

許智香 単に朝連と民団という左右ではなく、そのなかでの世代問題もあるのですね。

文京洙 左右の中は大体同じなんだけど、いわゆる右って言われていた民団の中に左の青年たちが出てきたという、そういう構造。大学の雰囲気としてはね、留学同っていうのはある意味では何となく親睦会みたいな感じの仲よしクラブみたいだけど、韓学同のほうがものすごく先鋭で、そんな感じだったね、ただ、一応、70年代ってのは、留学同の場合、まあ建前的なこともあるんだけど、チュチュエ [主体] 思想が台頭する時期なわけ。60年代末ぐらいから70年代はじめは。総連がすごく硬直化す

るしね、そのなかで金炳植事件²³⁾が起きるわけ。それで金炳植が失脚するんだけど、失脚したからといって、その硬直化が緩むんじゃないくて、ほとんど同じような形に進む時代が70年代。

許智香 総連の失脚、例えば、59年に始まった帰国事業の実相のようなことが明らかになっていくなかでも、在日社会では主体思想が強くなるってというのはなぜですか。

文京洙 (北の方では)68年ぐらいから完全に唯一思想体系になっていく。その北朝鮮の変化と合わせて、総連もそういうふう硬直化していった面がある。最初は韓徳銖と彼の姪の夫である金炳植、この2人で仲よく独裁体制を作っていくなかで争うんだけど、最後はおそらく単なる権力闘争だと思うけれどね。金炳植は率先してその硬直化を進めていったけど、最後は韓徳銖をも追い落とそうとしたわけね。それが逆に追い出されて。最終的にどっちに軍配を上げるかっていうのは金日成が判断する。あの時期はふくろう部隊とかいって、金炳植の親衛隊みたいな連中がいて、それが組織の不満分子を拉致したり、寄付を強要したり、地方に送ったり、そういうこともあった。ただ、そういう乱暴なやり方はさすがに72年以降、金炳植がいなくなっただけでなくなったように思う。

許智香 朝連傘下の留学同もふくろう部隊のような人々を抱えていたんですか。

文京洙 それはなかった。それは朝青が先頭。朝鮮青年同盟だとか、あるいは総連の本部の組織だとか、影の部隊みたいの一番、主力になったのは、そういう人たち。留学同は総連の傘下だけど、主体思想を勉強しろ、勉強しろっていう圧力はあったけど、私の知っている限りではそういう暴力的な状況はなかった。

文京洙 だから、一般に考えられているように、韓学同は韓国の政治にべったりで、というのではなくて、逆に、独裁政権に反対する民主化と統一というのを掲げて、事実上は社会主義、マルクス主義を標榜している。

林茂澤 韓学同とか韓青同っていうのは、60年代の中頃から自らそういう志向を持っていた。差別など、社会の矛盾、不条理っていうことなかで、平等社会ということを考え、追求していくと、自然にマルクス主義に近づいていくわけですよ。だから、そのマルクス主義が誰かに教えられるとかいうことじゃなくて、自分たちの境遇を打開していくために、平等な社会をどう作っていくのかっていう指針がそこにあった。一番近い、手にさわることのできるものとしてそこにあったわけですよ。だから、そういう人たちが中心になって、韓青同に中に入って、もちろん全体がっていうことじゃなくって、そういう政治(?)的な人たちが組織作りをしていって、指導していった。これが60年代の終わり頃から70年代にかけての状況です。

許智香 林茂澤先生の著作に出てくる定期講習会みたいなものもマルクス主義の勉強でしたか？

林茂澤 いや、

許智香 それはまた違うんですか。

林茂澤 個人で勉強するか、ごくごく秘密で学習会をやる。ほとんど一般の青年たちは知らない。全く極秘でやります。ごくごく2,3人とか4,5人。多くて4,5人。それも

そんなに長期的にはできなくて、単発的に何かあったときにするぐらいですね。

許智香
林茂澤

記録して残すこともできなかった？

それはもう絶対できない。民団は国是が反共主義ですから。だから、マルクス主義を勉強するっていうのは完全なご法度ですから。だからもう完全秘密です。

韓青同っていうのは、一般の青年を対象にするわけで、ダンスパーティーしたり、キャンプに誘ったり、あるいはウリマル〔我が語、つまりコリアン語〕講習会とか、いろいろ誘ったりするわけですよ。それが主な活動で。だから、マルクス主義を学習するっていうのは、ごくその中の、例えば2、3人ですね。多いときは京都本部全体で100人ぐらいいたもので、そのなかで2、3人がそういう勉強を個人的にしてきて、また小グループで、2、3人で勉強を何回かした程度です。そういう中心になるメンバーっていうのは、そういう考えを持って、僕もそのうちの1人ですけども、そういう自分なりの漠然とした目的を持って運動に参加した人が何人かいて、その人が中心になるんです。どうしても。

文京洙

60年代、70年代はもう少しははっきり厳密に考えなきゃいけないんだけど、日本社会全体がマルクス主義の全盛期だった、この時代はね。法政、立命館はまさにそういう雰囲気だったと思う。60年安保闘争があって、60年代末には全共闘の運動があって、70年代、80年代初めぐらいまでは、大学のなかで、普通に勉強しても少なくともそういうラディカルな空気が自然に入ってくる時代だったから。そういう勉強は韓学同とか韓青同のほうがよくやってた。活動家たちはね、すごく、むしろ向こうの方がしていた。

許智香

マルクス主義者でありながら、反共である祖国も訪問したりするんですね。

3 韓青同の時代的推移——民団からの排除、そして金大中とのつながり

林茂澤

だから、韓青同っていうのは、さっきもいったように、一切、自分はそういう志向を持っていても、絶対表には出さない。確信犯です、みんな。もちろん、数人ですよ。例えば、一つの県本部単位で言えば、2、3人程度ぐらいでしょう、そういう志向性を持っている人は。それ以外の人は、単に行事に参加して、男性だったら、女性に興味があるとか、そういう人たちもいるし、さみしいから来るとか、その程度の人たちもいるし、いろんな人、ごちゃ混ぜですよ。だから、そういう、何か、政治結社組織的なそんなもんは全くなくて、本当の大衆の娯楽を中心とする文化的な要素をふんだんに取り入れた活動っていうのがほとんどすべてなんですわ。だから、政治的に何かするっていう場合は、例えば、外国人学校法案、そういう学校設立に関する、不当な日本政府の法律による圧力とか、あるいは出入国管理でいろんな活動を、政治活動も含めて規制するとかいう、そういう政治的な課題が出てきた場合には、政治的な反発をするっていうことがあったんだけど、それ以外は、韓青同っていうのは、いわゆる民族意識を取り戻そうっていうことで、チュム〔伝統踊り〕を習ったり、韓国の歌を覚えたり、ハンゲルを勉強する講習会をするとか、そういう組織だったんです。だから、それが明らかに変化していくのが71年、2年ぐらいからでした

[もっと積極的に政治に出ていく]。

許智香
林茂澤

維新体制の時ですね。

そう。つまり、本国が独裁の時代じゃないですか。そうすると、民団もその意向を受けて、そういう活動を中心にするわけですよ。それに対して、なぜ韓青同が出るかっていうのは、いわゆるベトコンって言われる人たちが、自分たちはベトコンって言わないですよ、極端に隠してから、自分たちは共産主義者のこれっぽっちもないっていうことで活動しなくちゃ、活動の基盤自体が崩壊してしまいますから、自分たちは反共主義者だという建前でやるわけです。だから、それで中央団長選挙を取りにいったわけです、71年に。2、3年前から始まるけども、それで、権力側は、つまり民団の中枢部とかKCIA²⁴⁾の部分は、そのベトコンの存在はもう知ってるわけですよ、いろんな情報を持ってるから。だから、選挙に介入するわけ。中央団長選挙に。ひょっとしたら、ベトコンが推す候補は団長に当選するかもわからないっていう危機感を抱いて、露骨に干渉したりしたわけですよ。それがきっかけです。それで、どんぱちとなって、結局ベトコンは完全に民団社会から排除されて。民団の民主化はもうできないからあきらめたわけです。あきらめて何をするかいうと、本国の独裁政権を倒せば、民団の民主化は自然とできるという、そういう目算を立てたわけです。だから、民団の民主化を放棄して、本国の独裁を倒すためのいろんな方策を講じたなかで、金大中とひつつくわけです。ちょうどそのときに金大中氏が、拉致事件の前で、アメリカに半亡命みたいなかたちで活動しだすわけです。日本に来たり。というなかでつながりができて、金大中を推すということで、本国との政治にかかわっていきこうとしたわけです。これがその（韓民統）までの一連の流れ。

4 住民の論理が台頭する一方で本国を志向する民族の論理が併存

許智香
文京洙

その時代に文京洙先生は大学にいてアルバイトをしながら。

そう。留学中で活動して。だから、大きな流れでいうと、パリロ [8・15 = 解放] のあと大体60万人ぐらいが残るんじゃない、ここにね。それが在日の出発点になるんだけど²⁵⁾。戦後の最初の在日の運動は、この時期は総連（その前身の朝連）が多数派なんだけども、おおげさないうと、民族の論理と、住民の論理——ここに住んでいるという住民の論理の間ですと揺れ動いてきているわけ。そこで、50年代末に帰国運動が起きる。これ、無理やり連れていかれたんじゃない、自分たちで「地上の楽園」を目指した。というか、日本の生活があんまり貧しいから祖国を志向する。それと、4・19があった。李承晩政権が倒れて統一も近いような雰囲気もあった。その頃から完全に本国志向になるわけ。住民の論理が忘れられてしまって。要するに、50年代末から60年代にまでは祖国が民主化され、統一すれば、在日の問題も解決するんだっていう発想になっちゃう。それが60年代ずっと続く。しかも70年代には、南北共同声明があった。まだそのときの光景を覚えているけども、部室でぶらぶらしてたら、いきなり同じ朝文研のメンバーが入ってきて、万歳って言って、朝鮮が統一するって、入ってきたわけ。まだそのぐらいの雰囲気なわけ。だから、本国志向っ

ていうのは要するに、ほかの言い方をすると、帰国の思想で、朝鮮が統一すれば、在日の問題なんかみんな解決するんだっていう発想ね。ところが、70年代ってというのは、私たち戦後生まれの二世が就職、結婚、子育てをするなかで、地域社会の問題に直面するわけ。そうすると、日立就職差別裁判事件²⁶⁾が70年にあって、地域の権益擁護運動の流れが台頭する。つまり、運動が二つの方向に分かれていくのが70年代なんだと思う。一方は本国志向、帰国の思想で、そのままずっと続く。さっきの韓青同も、要するに国が民主化する、(今、民主的ではない)韓国が民主化すれば、在日の問題も解決するって発想だからね。そういう流れが一方である。それが多数派ではないけど。普通の在日二世は日常的にそういうところに接しないで、日本名を名乗って、政治的問題意識もなく育っているわけね。そういう人たちが大人になって、結婚だとか、就職だとかに直面するなかで差別を体験すると、やっぱり地域の問題を解決しなきゃいけないっていうことで、民闘連²⁷⁾っていう運動やそんな流れが70年代から現れてきてね。子ども手当だとか、公営住宅の入居だとか、就職差別を中心に、定住を前提に日本のなかでどう生きていくかっていう方向が出てくるわけね。要するに、70年代は、住民の論理の一方で、依然として民族運動の論理が生きていた。私も70年代初めぐらいまではまだ本国志向で、日本でうまくいかなかったら、もう帰ろうと思ってた、北に。それぐらいの気持ちがあった。北に対していろんな矛盾を感じていたけれども、こんなにひどくなるとは思ってなかったし、韓国はもっとひどいし。北に行ったら、少なくとも差別されずに普通に仕事はできるだろうと、生活はできるだろうぐらいの感覚があった。

- 許智香 70年代入ってもその感覚はあったんですね。
- 文京洙 まだ金日成主義も、小さな国が生きていくためには団結しなきゃいけない、団結するためには指導者の思想に固まんなきゃいけない、だから、神格化もある程度はやむを得ない、そういう発想があった。そこから出ている多くの在日、どっちが多いかわからないけども、70年代というのは、朝鮮学校に通う学生の数はまだ4万以上5万近くいた時代だったから。
- 許智香 本国志向っていうのが、今でもまだ難しく、民主化を志向するのか、統一を志向するのか。
- 林茂澤 統一の前に民主化が必要だと。極端に言えば、韓国が朴正熙の独裁政権であるから、これが倒れて民主化できれば、北を中心とした統一が可能になるという、そういう北が主導するのを思い描く部分が一部分にあったんです。韓青同の中にも、一部だけど、そういう考え方があったんです。それがいわゆる帰国思想っていうやつですよ。つまり、韓国を民主化することによって、北の主導による統一の可能な条件が整うと、韓国が民主化されればそれができるんだという考え方です。
- 文京洙 総連の発想はもっと進んでいて、南朝鮮革命論だからね、少なくとも60年代まではね。
- 林茂澤 (笑)
- 文京洙 南朝鮮で革命が起きて、民主化が起きていきなり統一じゃなくて、連邦制とか過渡的な期間をおいて統一をしていくというのが、60年代ずっと。だから私はずっとそ

うやって考えた。民主化っていうよりも革命だと。

林茂澤 だから、本当に今から考えれば、全くでたらめな話なんだけど、それが一時期あったんですよ。

文京洙 あの時代は、例えば、李承晩政権が学生運動で倒れたり²⁸⁾、朴正熙政権も安定していないしね。南朝鮮革命というのは、要するにアメリカを追い出す、「米帝ムロカラ[出ていけ]」というスローガンがあった。アメリカを追いだして、自主独立をしていくという、自主独立すれば、自然に連邦制からだんだんと高い段階の統一に向かっていくだろうっていうのが真剣に考えられていた。北と南の経済力の逆転は70年代に入ってからなわけね。60年、李承晩の時代っていうのは本当に貧しかった。国民の一人当たりの所得が80何ドルだ。100ドルもいかない時代だった。今は4万ドル近くなっているけれども、そういう時代だから、可能性はすごくあるようにも思えた。南では民衆が立ち上がって李承晩も倒したしね。立ち上がって、革命が起きるかもわからないって。

5 7・4 南北共同声明の発表を疑問に思う人と「統一」を期待する人

林茂澤 だから、71、72年のときに、先ほどもいったように、韓国の民主化をすれば、統一の条件が整うんだという本国志向的な考え方を、僕も一時期したことがある。71年のときに、民団から傘下団体を外され、その後、72年に7・4共同声明が出たときに、僕はすごく疑問に思ったんです。つまり、明らかに本国では、朴正熙は統一する意思がないし、そういう方向にはこれから進まないと僕もわかってたんです。具体的に何かと言えば、民団は表向きでは7・4を支持するというふうにはいいながらも、例えば、朝青と共同の集会をやるということは絶対反対する。本国が民団に指令を出すわけです。つまり、北との関係で自分たちの立場上有利な条件を作ると。統一しようという意思は全くゼロです。そういうなかで、民団はそういう指令を受けて動きますから、そういう状況のなかで韓青同がそれに反発して運動するということは、民団社会から完全に吹き飛ばされるということです。でも、韓青同の唯一の基盤は、民団という同胞社会のなかで、自分たちの目指そうとするものを少しでも達成しながら、何かもう少し先のものを見通していこうという、そういう運動を僕は考えていた。先ほどもいったように、マルクス主義的な志向を持っている人らはごくごく少数ですよ。あと、一般大衆の青年はそんなことは全く考えてないわけです。唯一考えているとしたら、自分たちの就職の問題、名前の問題、結婚の問題、そういうことが非常に不合理的な状態に置かれている現実を少しでも改善したい、あるいは自分なりに方向性を見つけたいという気持ちを持っている人がほとんどです、韓青同に来る青年たちは。そういう人らを全部ほったらかして、民団と対決して、民団社会から放り出された場合、僕は運動ができるのだろうか。何か目的を持って何かを着実につかむことができるのだろうかということ、僕は迷って、葛藤しましたんです。それが71年から72年です。だから、7・4共同声明の発表されたときに、僕は落ち込んで、僕がその時の委員長だったので、共同大会をすることに対して、否

定はしないけども、ものすごく迷ったんです。

文京洙 今話を聞いていると、やっぱり（林茂澤の方が）もうちょっと熟しているというか、大人だったんだね、その時代ね。私はまだ20歳前後じゃない？私たちは7・4でわいわい騒いでいるだけでそんなに疑問に思ったり、躊躇したりというのはなかった。そのまま受け入れていた。

許智香 林茂澤先生はどこの支部の委員長だったんですか。

林茂澤 京都本部の。

許智香 京都本部の委員長っていうのは、その下に何人ぐらいの人がいるんですか、組織的に。
林茂澤 一応、青年はどれぐらいいたのかな。対象者はかなりいたと思う。2500～2600から3000ぐらいいたんじゃないですかね、対象者は。参加するのは何か大衆的に動員をかければ100人ぐらいですかね。それぐらいの規模です。

文京洙 その韓青同と朝青同の合同大会というのが、私が留学同にいたときにあったけど、地方からバスでみんな来るんだよ、青年たちがね。千駄ヶ谷であった。何人ぐらい、8000人ぐらいかな、ちょっと記録見ないとわからないけど。私はだから留学同だったから、地方からたくさんバスが来るので、バスの駐車場の整理が大変だった。

林茂澤 京都だけで2000人以上入った。

許智香 比率的にどっちが多かったのですか。韓青同と朝青同。

文京洙 朝青の方が多いいよ、やっぱり。

林茂澤 そりゃ、朝青の方が多いい。動員力、組織力は圧倒的にあった。

文京洙 しっかりとした民族学校を土台としてあるっていうことは大きい、やっぱり。

林茂澤 それと、民団も、それなりに組織力は7・4のときにはあったし、民団員と言われてる人はいたから、総動員をかければかなりの動員力はありました。でも、実質的には民団は反対ですから、傍観じゃなくて、反対の立場を取っていたから、だから朝青のほうの動員力というのはかなり影響力を持っていた。

許智香 林茂澤先生は大学には進学されずに、最初から活動をしていたんですか？

林茂澤 私は浪人して、パチンコやったり、エロ映画を見たり……大学にいく年にね。

皆 (笑)

林茂澤 目標がなかったのね。

許智香 何年度ですか。63、64年ですかね。

林茂澤 うん。浪人して……予備校に登録をしたけど、勉強も全然なくて。遊びほうけて。結局は目標何にもなかったわね。そのあと、建築専門学校に行って、1年ぐらい通ったかな。それもケツ割って、あと、大工になったら手に職をつけてめしは食えるということで、3ヶ月ぐらいはやったのかな。そういうことがあって、そのあと、65年ぐらいにちょうど日韓条約の頃にかけて、66年ぐらいに韓青同と出会うんです。で、そこに参加しだすんです。そこからが始まりです。

6 協定永住権による在日社会の分断、そして朝鮮部落

文京洙 全体の構成でいうと、戦後、だから52年のサンフランシスコ講和条約の頃は80%か

90%が朝鮮籍だった。それが1960年で3対7ぐらいになるわけ。7がまだ朝鮮籍。必ずしも朝鮮籍が総連とは限らないけれども、ほぼ総連系だから、7がね。帰国運動があって、盛り上がった時代だから、まだね。ところが、65年の日韓条約で、韓国籍に限って協定永住権が取れるようになったんです。永住権がないってことはどういうことかという、例えば、あの時代、在日は国民健康保険にも入れなかったんだ。いろん話を聞くと、やっぱり健康保険のことが結構大きかった。民団を支持する、韓国を支持するっていうんじゃないでね。それで逆転するわけよ。70年前後で比率が6対4ぐらいになる。朝鮮籍が少なくなってくるわけ。ただ、学校だとか、民族、韓国籍になってもまだ総連と近い人もいたからね。そういうことでいうと、拮抗していたかな、あの時代は、力がね。70年前後は²⁹⁾。

許智香 文京洙先生の国籍の話はここに書いていましたけれども³⁰⁾、林先生の場合国籍はどうなってるんですか。

林茂澤 僕はもう、いつ頃だろう……親がもう、というのは朝鮮部落があって、その部落に民団の役員をしている人が住んでいた。だから自然に私たちが住んでいた部落では、ほとんどが民団になるんです。50何年ぐらいかな、僕が気づいたときには、既に韓国籍になっていました。

許智香 先生の親たちで？

林茂澤 そう、両親がもう民団の社会の中にいたら自然と韓国籍への切り替えが始まっているんですよ。あれは何年ぐらいだったかな、はっきりいつだったかいうのは記憶にないけど。

許智香 その町に誰が住んでるのかによって、その町全体の雰囲気が変わってくるんですか。
林茂澤 別に政治的な意識がある人っていうのはほとんどゼロでしょう。もう、食うの、生活するのに精いっぱい、韓国がどうの、籍の問題とか、将来どうなるかっていう、そういうことよりも、毎日毎日の生活することが、それしか考えてないですから。だから、近くにそういう影響力のある、民団の役員をしている人が、今度これがあるからあれしましょう、これしましょうといったら、もうそれで通るわけですよ。

文京洙 私は東京の荒川区で育ったんだけど、あそこは圧倒的に総連が多い。一番最初にできたのが第一〔現在の東京朝鮮第一初中級学校〕なんだけど、だから学生もものすごく多かった。でも、一応、民団もあったし、教会もあって、教会に行く人たちは大体民団の人たちが多かったな。最初はみんな朝鮮籍。47年に外国人登録令ができたときにはみんな朝鮮籍。それに対して、民団側が韓国に変わろ変わろって訴えて行って、49年頃かな³¹⁾、一斉切り替えというのがあった。そのときに韓国籍に変える人が少し増えてきた。50年代の初めぐらいは10%か20%、韓国籍はね〔15%ぐらい：注29を参照〕。林先生もその切り替えのときに切り替えていったんじゃない？50年代だから。

林茂澤 大体、その頃だろうと思うね。僕の両親が韓国籍に切り替えたのは。

文京洙 52年4月にサンフランシスコ講和条約が発効と同時にみんな外国人になる。***国籍***

- 許智香 法務府民事局長通達。通達でやっちゃうんですね。
- 文京洙 だから、一律に旧植民地出身者は国籍を喪失するという判断をされるから、全部。それまでは朝鮮とか何とかっていても、地域だけを表して、潜在的には日本国籍だった。それが国籍を離れて、で、韓国政府や民団が働きかけるわけ。在日って家〔故郷〕もほとんど南の方じゃない？国交はまだないけど、一応、日韓の間は行ったり来たりも、商売もできる。それが基盤になって民団の勢力が伸びていく。パスポートを出すとかなんかで。それでも韓国籍に変えない人が朝鮮籍として残るわけ。朝鮮籍に意味あってと、そういうことではない。民団に、韓国籍に変えなかった人たち。もちろん朝鮮籍で残ってる人は圧倒的に北朝鮮を支持する人が多いんだけど、必ずしもそうではなくて、戦後の過程で韓国籍に変えなかった人たち、あるいは帰化しなかった人たちが朝鮮籍として残る。それ自体は、ある意味では意味がない、朝鮮籍そのものは。
- 許智香 守るというより、「変えない」の方に意思があるんですね。
- 文京洙 意識的にそれを守った人が多いんだけど、必ずしもそうじゃない。だから、自分は無国籍だっていうふうに、丁章っていう詩人はいつてるし³²⁾。
- 大体、民団、総連、あるいは南北の力の趨勢を反映して、2万7000人かな、今、朝鮮籍ね。
- 許智香 それでも2万7000ぐらいの朝鮮籍がいるんですね。
- 文京洙 だから、そういうふうな、まだそんなにいるんだっていう人と、そんなに少なくなってしまったのかっていう人と、両方だと思うよ（笑）。法務省がその構成を20年ぐらい発表していなかった。
- 林茂澤 その発表はいつの発表？
- 文京洙 3年ぐらい前から発表していますね。
- 改めて発表しました。71年ぐらいまでは発表していたと思う。71年ぐらいまで発表してるってことは、日韓条約を前後して比率が変わるってのがかなり表れている。
- 林茂澤 やっぱりどうなんだろう。国だったら、北と南の関係っていうのは、政治的なものとか、あるいはユギオ〔6・25＝朝鮮戦争〕の、朝鮮戦争のかかわり方によってすごく変わるわけじゃないですか、自分が体験するから。でも、在日の場合は、実際6・25の体験はしないわけでしょ。だからその体験によって、南北の片方を非常に敵視するとかということは生まれるかもしれないけど、在日の場合にはそれはないわけですよ、日本に住んでいるんだから。それともう一つは、やっぱり具体的に自分たちの生活の問題が非常に日常的なコッチョンコリ〔悩むこと〕だから、政治的にどちらを応援する、あるいはどちらの国籍を取ってっていうことに関してはそんなに考えなかったんじゃないかな。だから、僕のアブジ〔父〕、オモニ〔母〕にしても、近くはみんな民団の人だから、国籍を韓国にするという人が多いから、それについていくという程度ぐらいで、政治的な判断というのは、特殊な人を退けては、一般の人たちはほとんどしなかったんじゃないかなっていうふうに思ってる。
- 文京洙 60年代は少数派だったけど、民団もかなり勢力があったしね。民団の人間で在日で

ありながら朝鮮戦争に参加した人たちも600人ぐらい…

林茂澤 義勇軍が行ってたんだからね。

文京洙 640人余りいるんだよ。220人ぐらい帰ってこれなかったみたいだけど。再入国できないから。で、韓国へ行こうとすると、やっぱり民団で許可か何かをもらったんじゃないかな。

7 二世たちを困む日本社会、結婚、就職そして生きていくということ

許智香 文京洙先生が大学を卒業して社会に出た年って何年ですか。

文京洙 社会に出てないんだよ、だからおぼちゃん。すごく貧しく育っているのにおぼちゃんみたいな性格になっちゃった(笑)。社会に出て苦労するということがなくて。75年に法政を卒業して再び中央大学。そこを卒業したのは77年の3月。要するに6年間大学に行ってるわけ。

で、77年、あの時代は本当に就職差別もひどいし、普通に就職できるっていう感覚はなかったから、私たちはね³³⁾。みんな、商売やるか、金融やるか、パチンコの景品買いやるか、そんな感じだったね。

林茂澤 就職なんて不可能だから。

文京洙 うちはビニールの工場みたいなのがやってたんだけど、あのときは景品買いやっていたの、うちも。

許智香 お母様が。

文京洙 最初は機械1台を入れて家内工業をやってたんだけど、それもだめになったから、うちは基本的に景品買いで暮らしてた。仕事がないから。朝鮮学校を出て、大学を出たらイルクン〔朝鮮総連の専従職員・活動家〕になる子も多かったけどね。稼業を継ぐか、学校の先生をやるか。でもウリハッキョ〔朝鮮学校〕の先生は給料が本当にちゃんと出ないから、親がよっぽどしっかりしてないと学校の先生もできないの。普通に給料が出るのは病院や銀行ぐらい。うちのつれあいがそうだけど、西新井病院という大きな病院があってね、金萬有さんという³⁴⁾、平壤に病院を建てるほどの人だった。病院で働くと労働組合があるから普通に給料が出るのと、あと銀行。朝銀〔朝銀信用組合〕へ入ると大体、銀行の規定があるじゃない？あとほかは教員だとか、あと新聞社だとか。私も大学を出て一頃は朝鮮問題研究所で『朝鮮月報』³⁵⁾とか『朝鮮問題研究』とか出していた総連系の研究所があって、そこに行こうと思ったんだけど、そこは拒否されて。『朝鮮新報』じゃなくて別の新聞社があって、そこへ行けていわれた。行かなかったんだけど。法政の在日の同級生、日本学校から法政にきて、卒業して、『朝鮮新報』で働いたのも何人かいるし。そういう時代だった。普通に就職は難しかった。

許智香 新聞社には行かなくて、その後は？

文京洙 そのあと、大学院に行った。いろいろ考えながらも大学院はそんなに難しくないから。もうぎりぎりになって受けたのかな。そしたら受けるところがほとんどなくて、法政しかなかった。友達も法政の大学院に行っていたから。その社会学研究科という

ところに入った。

許智香 大学院に入ってからは……？

文京洙 私、大学院9年かかったよね（笑）。マスター3年、ドクターが6年。その間もずっとフリーター、友達と塾を経営したこともあるし、大宮で。大学院を卒業したときには非常勤講師になっていた。

許智香 民主抗争、その時代ですね。86年、87年の。

文京洙 卒業したのが、まだ全斗煥の軍事独裁政権で。何年だ、私、大学院出たのが。

許智香 9年通ったとしたら86年です（笑）。

文京洙 86年か。ちょうどだから民主化するかしらないかで。最初に友達と2人で書いた本が大月から出たのが90年³⁶⁾。だからそれは民主抗争が一番中心のテーマで書いてある。むしろ韓学同、韓青同の人たちに読んでもらったみたいで、当時は<民族>とか<民衆>とかという観点から韓国の変革を捉えるのが一般的だったけれど、市民社会の胎動という観点で韓国社会の変化を捉えた本で冷戦の終結と重なってそれまでの運動にいろいろ矛盾や行き詰まりを感じていた時代だったから。

許智香 市民社会っていう概念を、なるほど。

文京洙 いまでは市民社会といっても当たり前の概念になっているけれど、当時としては市民社会ってちょっと新鮮だったみたいで、結構呼ばれたりしたよ、話してくれて。韓国に市民社会などあるわけない、って批判する人もいたけれど。

許智香 結婚されたのは80年代ですか？

文京洙 ドクターの時だから87年か88年。いい歳なので大学院に行ってるなんていえなくて、結婚式のときは、塾の講師ですって言ってたから。紹介するときに塾を経営してますとか何とか（笑）。その後89年に国際基督教大学で常勤助手をやって94年にこっち[立命館]に来た。95年に韓国籍に変えたのかな。そのことは別の本に書いてるけどね³⁷⁾。恥ずかしながら94年までは外国に行ったことがなかった、日本から出たことがない。

許智香 林茂澤が結婚されたのは70年代ですか。結婚された当時の話を聞かせてください。

林茂澤 71年。26歳のときに結婚した。当時は、実家の闇米屋の手伝いをしていて、大工をしたあとに、闇米屋をしていた姉が嫁いだから、僕がそのあとを継いでやるわけですよ。稼業は闇米屋でしたから。

昔は食管法³⁸⁾っていうのがあって、米はその法律によって縛られるんです。だから、許可制で、政府から許可を受けないと米屋はできない、そういう時代だったから。以前の担ぎ屋からの流れから、担ぎ屋の説明なんかしだしたら、また長くなる（笑）。先ほどいったように、66年から韓青同の活動に参加して、68年から常勤[韓青同では、朝鮮総連で専従活動家を意味する「イルクン」のような意味で、「常勤」という言葉を使った。給料はむろん出ない。]になった。常勤になったって、給料なんか出ないわけですよ。まだ民団の傘下団体にいてまだ1ヶ月に1万か2万ぐらいの小遣い銭は出てたけど、生活はとっててもできない。それで、結婚はしたくなかったんだけど、親がもうわんわんわんわんいうから。親はとりあえず子どもは結婚をして、孫を見て、

それで自分の人生は終わるって一つのライフパターンがあるから、あんまりやあやあいうし、したほうが活動にも都合のいいかなというふうに思って結婚したのが71年。そのあと、録音事件で³⁹⁾、もう民団社会でごちゃごちゃの、血みどろの関係が始まる。だから、結婚したあとから、もう大変だった。収入はないわ、組織的にはもうぐちゃぐちゃだわ、延々と。それから、76年に僕は委員長を降りるんですけども……

許智香 76年に。

林茂澤 うん。その間はもう本当に地獄みたいな日々でした。

許智香 委員長から降りられたあとは……

林茂澤 あとの話は、だから、一応、そのあと、韓民統との関係は少し続くんだけど、1年ぐらい。でも、僕はもう韓青同の終わり頃から、いわゆる本国の民主化に没頭する在日の運動はもう限界があるっていうふうに、僕は72、3年ぐらいから思っていたんです。だから、それ以降は距離をおいて、自分なりにおいたかたちで民族運動を見ていこうということで、とりあえず生活しなくちゃいけないし、身近に漢方薬をしている人がいたので、その人を見てたら、あれをすれば、生活をしながら民族運動にもかかわれるんじゃないかなという、安易な考えを持って薬屋を始めたんです。薬屋を始めてみても、やっぱり人間の心は満たされないんですね。民族運動から一旦は、直接は離れるんですけども、自分はじゃあ、これから民族とどうかかわるのかという問題を延々と悩み続ける葛藤は、その後ずっと続きます。

許智香 30代中盤から。

林茂澤 その延長線上の成れの果てが韓国に留学をするということになるんです。99年。

許智香 20年ぐらい悩み続けながら、ずっと薬屋さんですか。

林茂澤 そうです。

許智香 じゃあ、お薬さんが本業だったと言っても過言ではないですね、経済的には。

林茂澤 そりゃそうです、もちろん本業で。

文京洙 あの時代表、だから、さっきいったように、就職ないし、研究者の道もないわけ。一応、大学に行ってるから研究者目指すんだけど、あの時代、例えば、姜徳相先生とか、姜在彦先生だとか、李進熙先生だとか、いろんな立派な研究者がいるんだけど、全部非常勤。

林茂澤 専任はなれない。

文京洙 なってない。姜在彦先生は最後までなれないし、姜徳相先生は最後なってたけどもね。要するに、国立なんか、完全に外国人シャットアウトしてたし、外国人は任期制だけちょこっと取るくらいで、教員になれないっていう時代。理工系は結構、助手までは採用されてたから、いたんだけど、研究者を志してる人たちは理工系は北に帰る選択をする人が多かった。

姜徳相先生もそうなんだけども、中華料理のお店をやってるわけ、家がね。林先生は薬屋か(笑)。私なんかも喫茶店でずっと働いてたから、喫茶店か何かを開いて、2階を自分の家にして、ひとつきに1回ぐらい雑論を書いたり、そういう生活を考え

てたけどね。夢はそれ（笑）。専任になれるっていうのはほとんど考えなかった。在日の専任がぼちぼち出たのが80年代の終わりぐらいかな。80年代後半が、日本社会が国際化する大きな転機だった。85年にプラザ合意があり、日本の円がすごく高くなるわけ。円が高くなるっていうことは、アジア系の外国人労働者が日本社会の日常に入ってくるし、日本人の海外体験も相当増えてくるわけ。だから、内なる国際化だとか何とか言われてきて。立命館大学で国際関係学部ができたのが88年。ただ、94年に私が立命館に来たときは、立命館に韓国人の教員は在日を含めて1人しかいなかった。許萬元さんっていう、ヘーゲル哲学をやってる教員が1人だけだった。それから随分増えたけど、90年代ではまだ韓国人の教員は少なかった。

林茂澤 高校2年か3年のときに、担任の先生が呼び出したんだね。で、職員室に行くと、卒業してどうするんだっていうから、いや、まだ何も考えてないですっていったら、就職は学校から紹介できないですよっていった。

文京洙 そういう時代だね。

許智香 学校の話が出たのでついでに、林茂澤先生は、林っていう本名で学校を通ったんですか。

林茂澤 僕はそうです。名前はそのまま、読みは日本読みです。林（いむ）の場合は、日本人でも林（はやし）がいるから。

許智香 文京洙先生は？

文京洙 私は朝鮮学校だから。日本の名前もあるみたいけど、ほとんど使ったことがない。

許智香 あ、そうですね。

林茂澤 僕は全部日本の学校だった。

許智香 民団系は朝鮮学校にはあんまり行かないですか。

林茂澤 行かないです。少ないです。だから、京都だったら1カ所あるんだけど、僕の5歳と3歳上の姉はそこに行ってるんです。だから、戦後すぐっていうのは、在日は民団か総連か関係なく、皆民族学校に入れたんです。国語講習所みたいところがあって、皆そこに行ったんです。だから、僕の姉なんかも行っただけでも、48年になって、学校閉鎖令が出されるでしょ。僕の姉がちょうど小学校に入学する時期でした。そこに入学させたのに、すぐ辞めさせられたから、親にしてみたら、わけがわからないわけですよ。子どもは学校に行かさなあかんと思ってるのに、学校がもう閉鎖されるから。そしたらまた日本の学校行かなあかんとなる。で、字も何もわからへんのに、手続きも何もできないし、どうしたらええのか右往左往した一世の親は、そういう経験があるので、僕はもう最初から日本の学校になった。庶民っていうのはそんなもんなんです。庶民の判断っていうのは政治的な判断とか、そのときの日本政府とか、あるいはGHQがどうのこうのとか、そんなん何もわからないですから。自分がしたことがわけのわからない間につぶれて、それに関連して、非常に混乱の中に陥られたっていう、そういう記憶しかないですから。だから、そういうことに関して、非常に恐怖みたいなまでの感覚を持つわけ。だから、厄介なものを全部避けようとするわけ。

文京洙 だから、同じ在日の私たちの世代でも、朝鮮学校を出てる場合と日本学校を出てる場合は、全く体験の仕方が違う。小中高と9年間ずっと朝鮮学校なので、私は差別とか、そういうのほとんど経験ないわけ、日常的にね。三河島の朝鮮人コミュニティだから、逆に日本人のほうがいじめられるような世界だから（笑）。そういう世界だから、在日のことをいろいろ書いてきたんだけど、私は在日のことを書く資格ないんだ、本当をいうとね（笑）。

だから、朝鮮学校そのものを卒業資格として認めるっていう大学そのものが少なかった、あの時代は。そういう意味では民族教育を含む総連系の世界は、日本社会から隔離されているわけ。隔離された空間のなかで育っているわけ。卒業しても総連関係の仕事についたり、朝大行ったり。あるいはもう、私の世代では、72年に200人ぐらいが集団で北朝鮮へ帰ってるわけ。これもいろんなエピソードがあるんだけど、金日成の誕生60周年祝いで、朝鮮大学の学生を中心として集団で日本の全国をオートバイで行脚して、最後に北朝鮮にみんな帰った。200人ぐらい帰ったかな。

許智香 日本全国を回って……？

文京洙 うん。回って、自転車とかオートバイで回って、そのまま北朝鮮に帰った。同級生とか、1歳とか2歳の先輩と後輩も、あのときにいっぱい帰った。4月があれだった、60歳かなんかの誕生日。

林茂澤 （帰国事業が）始まってかなりたった後だよ。59年から始まったでしょ？

文京洙 そうそう。かなり経ったあと。ただ、さっきいったように、70年代の初めぐらいまではまだ在日の世界のなかで、北に対する幻想がまだあるわけよ、やっぱりね。

林茂澤 まだあるんだ、その頃はまだあったね。

文京洙 60年代になったら、いろんな、例えば、切手の裏に小さな字で「帰ってくるな」と書いたり、手紙に「帰ってこい」って書いてたら「帰るな」って意味だとかね。そんな話、聞いたことあるでしょう。

許智香 あります。

文京洙 そういう情報も入るし、北の悪口もいろいろ聞いているんだけど、それでもまだ普通に暮しはできるだろうと。金持ちにはなれないけども、勉強させてくれるだろうとかで動いた。勉強したいって帰るといふ人が多かったと思う。

林茂澤 そう。

文京洙 こっちで勉強できないから。

林茂澤 だから、民団社会のなかでも優秀だって言われる人がむしろ、北へ帰った。

文京洙 帰って、みんな、ある意味では人質になんだ、みんな。帰国した子どもがいるとかで、そこにお金を送るし。こっちで何か総連に反するようなことをすると、向こうで、最悪の場合は刑務所に送られたり、あるいは地方に送られたりっていうことが実際にある。80年代になると北の実態を描いた本など、いろんな本が出る。さすがにいろんな情報が入ってくるし、韓国は韓国で軍事政権だけど民主化したり、あるいは経済的に発展したりするし、最終的には90年の冷戦の崩壊で、在日の価値観が大きく転換するんじゃないかな、そこはね。

私たち戦後生まれの二世は、50、60年代の高度成長時代の空気の中で人格形成をしていて、個人主義を前提とした民主主義への意識が強い。北の在り方への違和感も当然生まれる。80年代になると、北への疑問が深まってくる。もともとそういう疑問があったから（総連の）専任にもなれなかったんだけど。70年代は、北は別にそんな、いざとなったら帰ってもいいぐらいに思っていたけども、だから、専任になれなれて、すごいいろんな圧力があつたけども、それに踏み込めなかつたよね。

許智香

先生の叔母の家族が北に行ったんじゃないですか、帰国事業で。連絡は取れなかつたですか。

文京洙

連絡してたよ。うちの母親、だから両親は90年代まで連絡してた。90年代以降になると連絡は途絶えたな、だから。私が積極的に連絡すればよかつたんだけど、同級生とかいたからね。積極的に連絡、そうだな、ちょっと北に対する考え方が随分変わってきた、90年代入るとね。冷戦後だね、やっぱり。冷戦後になると、もうだめだつていう感じだね。

林茂澤

でも、連絡を取り合えてる人はどのぐらいいるんだろう。

文京洙

結構いますよ、やっぱり。

許智香

手段は何ですか。

文京洙

だって、北に行ったり来たりするから。家族が向こうにいと。あれ見なかつた？『スープとイデオロギー』⁴⁰みたいな。

許智香

見ました。

文京洙

あれ、だから、監督のヤン・ヨンヒさんはああいう映画を作ってから、明らかに北を批判する内容の映画を作ってから北への入国ができなくなつたけども、いまだにそういう世界があるわけよ。というのは、朝鮮学校出て、朝鮮大学いくとか。例えば、朝高の修学旅行で北に行くじゃない？⁴¹北に行くし、朝鮮大学でもいろんな研修だとか何かで行くし、それから、向こうに親族がいるっていう人は結構頻繁に北に行っている。朝鮮学校を出て日本の大学に行って研究者になつてる人も何人かいる。そこは、まだ北朝鮮を中心として在日を囲い込んでる世界の中にいるわけよ、まだ。

許智香

まだいるんですね。

（世代の多様化、そしてこれからのこと）

文京洙

まだいる。それは結構いっぱいいる。

二世はどっちかっていうと、私なんかもそうだけど、一世の主流に対してはすごく反発を感じながら成長するんだけど、三世、四世っていうのは、ほとんど風化、同化していくという面と、逆に先祖返りする、民族的な感情が高まって、原理主義になっていくような方向が結構あると思う。

北の酷さは、私はもう弁解の余地はないと思うんだけど、ただ、敵対したり攻撃したりするつもりはない。話し合いをするほかない。対話しかない。韓国の保守右派政権は、＜鼻血作戦＞とって北はちょこっと突いたら崩壊するんじゃないかとか、自己崩壊するんじゃないかとか、金正恩に替わつたあと、若くて、国を引きつ

げるのかって、どうせつぶれるだろうって議論が結構あったんだけども、結局、もっているわけで、意外と強靱で、ある意味で合理的だという見方もある。一方で、戦争なんかできないじゃない、絶対に。ということは、どんなに相手が嫌でも対話するほかないんだよ、やっぱりね。

林茂澤 そらそうだ。

文京洙 それと、北はやっぱり、植民地主義の清算っていうことについては正当性があるわけだ。そういう民族的な正当性みたいのがまだよりどころとしてある。で、アメリカはやっぱり帝国主義で、アメリカの帝国主義と最前線で戦っていると、そういう論理みたいなものもあるから、まだ北を支持するというか、北をよりどころにするっていうのが理屈としてありうると思う。私自身は、論理的には全くもう崩壊していると思うんだけど、それでも、植民地主義批判とか、反帝国主義っていう見地からいうと、まだ北のほうが道義的に利があるだろうっていう認識が、若い研究者を中心にまだあると思う。それはだから、民族の論理だ、やっぱり、どうしてもね。住民とか市民社会の論理じゃない。

林茂澤 もう僕は、そういうどでかい物語ってのは全く考えないですよ。

許智香 でも、先生も考えてたんですね。

林茂澤 昔は考えたんです。

文京洙 それはだから、90年代の私の感覚もそうなわけ。要するに、韓国でもそうだけでも、巨大談論が言われなくなった。2000年代になると、あえて図式的にいうと、巨大談論から、一人一人の差異を重視した熟議時代になる。

許智香 2000年代まで上がった時点で、場所を変えましょうか。

Ⅲ 資料解題

2022年度より、立命館大学で「韓国現代史」の講義をすることになり、日韓の現代史に関する資料を精読する機会に恵まれた。主に参考した資料も、これまで接してきた徐仲錫や金椿春などの韓国の学者が書いた書籍以外に、文京洙の『新・韓国現代史』（岩波新書、2015年）や尹健次の『「在日」の精神史』1巻～3巻（岩波書店、2015年）など、在日二世の学者たちが書いた歴史書に触れることができた。1965年に出版された『ドキュメント・朝鮮人——日本現代史の暗い影』の冒頭に書かれた次の文章、「第二次世界大戦後の日本の歴史を、朝鮮とのかかわりあい抜きにして考えることはできない」という命題が脳裏に刺さった⁴²⁾。本インタビュー資料は、1970年代を生きた在日二世の二人の肉声を通じて、「朝鮮問題」を抜きには語れない、韓国および日本の現代史の一面を記録したものである。

むろん、宮田浩人がいうように、在日二世といってもその顔はさまざまであろう⁴³⁾。そのなかで、二人にインタビューを行った理由は、冒頭においても述べたように、まずは、1970年代を生きた彼らが実際に感じたものや見たものを身近に知りたかったためである。そしてもう一つは、従来、民団と総連は対立する組織として図式的に理解される側面があるが、それぞれの傘下組織に所属する青年たちの活動は、必ずしもその枠組みに収まりきるものではなかったと

いうことを、当事者たちの話を聞いて理解するためであった。

また、本インタビューには大きく二つの要素が絡んでいる。一つは政治の物語、もう一つは毎日を営んでいく具体的な身体である。インタビューという形をとったのも、後者つまり人々の具体的な話を通じて1970年代の在日青年たちの社会を理解するためであった。冒頭で紹介したように、林茂澤と文京洙は1970年代を20代の青年として生きた在日の方である。林は、民団の青年組織といわれる韓青同、文は総連の傘下組織として知られる留学同（朝文研）を中心に活動した。だが、本インタビューで林が「在日のなかで在日の運動をするっていう立場ではなくて、完全に浮いた状態で」と語っているように、若い世代の一部の人々は、外国人登録証の国籍名や運動団体など、既成世代が提示する枠組みを超えて、それぞれの本国志向への論理を模索した。その論理がそれほど単純なものではなかったことを、本インタビューは物語る。維新独裁体制の大韓民国が民主化されれば、祖国統一の道も開くと期待する林がいる一方で、現実を目の前にして疑問に思い、挫折し、運動から離れていく林もいる。そして、南朝鮮革命論だの主体思想だのと、与えられた物語はともかく、「日本での生活があまりにも貧しいから祖国を志向」した文がいる。「地上楽園」という物語化された話を信じるよりは「ダメもとで一度は行ってみる」という雰囲気があったという。

また、政治的な物語の以前に見えてくるのは、関係性を生きる人の姿である。まずそれは彼らが青年になる前の1950年代にすでにはじまった。閉鎖的な植民地主義に逆戻りするような日本の同化・排除のための在日政策、そして実施された外国人登録制が生んだ在日の国籍問題についてここで簡単に語ることはできない。「いつ頃だろう……親がもう、というのは朝鮮部落があって、その部落に民団の役員をしている人が住んでいた。だから自然に私たちが住んでいた部落では、ほとんどが民団になるんです。50何年ぐらいいかな、僕が気づいたときには、既に韓国籍になっていました。別に政治的な意識がある人っていうのはほとんどゼロでしょう。もう、食うの、生活するのに精いっぱい」と、民団の役員が住んでいた町に生まれた林は、自然に「韓国」国籍を持ち、民団組織に身を置いた。一方で、総連の活動家が圧倒的に多かった地域に生まれた文は、そのながれで高校まで民族学校に通った。

ふりかえって読んでみると、筆者が繰り返した「その本国志向の本国って何ですか」といった問いは愚かな質問だった。それは単なる「民主化された韓国」でも、「統一された朝鮮半島」でもない。むしろ場合や人によっては、帰国先としての「本国」でもあっただろう。だが、根本的には日本社会への訴えとしての「本国」であったようにも思われる。

最後に、インタビューに登場する諸事件や団体名については以下の注を参照されたい。

注

- 1) インタビュー対象の二人について、青年一般としてまとめる意図は全くない。本稿では、二人がそれぞれ関わった団体名「在日韓国青年同盟」と「在日本朝鮮青年同盟」に従い、便宜上「青年」という言葉を用いた。
- 2) 朴慶植も述べているように、在日朝鮮人に関する研究それ自体が常に運動のなかで考えられてきた側面があり、『在日朝鮮人史研究』の発行主体である「在日朝鮮人運動史研究会」（発端:1976年関東部会、1979年関西部会）という名称もそれを如実に表している。時代が上がるにつれ、在日たちの生活上の矛盾に直結した多様な運動形態が現れ、「朝鮮民族」という民族性が全面に出されることは少なくなっ

- たとはいえ、存在の起源が日本の植民地支配下の朝鮮に置かれているという事実は、依然として、在日朝鮮人歴史研究に「植民地批判」「帝国主義批判」としての運動性をもたらす。朝鮮半島は2023年の今でも分断状態に置かれており、慢性的な戦争状態が続いている。このような現状、そして1945年以降の朝鮮半島の世界での立ち位置を最も象徴的に表しているのが何より「在日」であるという前提——田中宏は「在日問題」はいうまでもなくポスト植民地問題である」と述べている（『季刊三千里』50号、1975年2月、32頁）。——に立ち、本インタビューを行った。
- 3) 朴慶植「在日朝鮮人史研究の現代的意義」（『在日朝鮮人史研究』21号、在日朝鮮人運動史研究会、1991年）；同「解放後時代の在日朝鮮人史研究の現状と私見」（前掲、25号、1995年）を参照。なお、金仁徳・坂本悠一訳「韓国における在日朝鮮人史研究」（前掲、33号、2003年）は、解放後より2000年代初頭まで日韓両方における研究状況を簡明に整理している。
 - 4) 最新の著作に尹健次『在日』の精神史』1～3巻、岩波書店、2015年を特記しておきたい。
 - 5) 聞き取りおよびインタビュー論文、科研課題はCiNiiおよび日本国立国会図書館HPで検索できる。ここでは、在日二世に関するインタビュー記録や自伝風の文章のなかで主に参照したものを挙げておく。（最新順に①単行本②論稿③雑誌）。①小熊英二・高賛侑・高秀美編『在日二世の記憶』（集英社、2016年）；前掲、尹健次『在日』の精神史；林茂澤『在日韓国青年同盟の歴史——1960年代から80年代まで』（新幹社、2011年）；文京洙『在日朝鮮人問題の起源』（クレイン、2007年）；崔碩義『在日の原風景：歴史・文化・人』（明石書店、2004年）；朴慶植『体験で語る解放後の在日朝鮮人運動』（神戸青年・学生センター出版部、1989年）；金時鐘『在日』のはざままで』（立風書房、1986年）；金石範『在日』の思想』（筑摩書房、1981年）②「特集・尹健次『思想体験の交錯』を読む インタビュー「私の思想体験」」（『情況』2008年12月号）③『在日総合誌・抗路』（2015年9月～進行中）；『在日朝鮮人史研究』（1977年12月～進行中、50号までの総目録が2020年50号に掲載されている）；『ほるもん文化』（1990年9月～2000年9月）；『季刊青丘』（1989年8月～1996年2月）；『季刊三千里』（1975年2月～1987年5月、総目次が1987年5月終刊号に掲載されている）。
 - 6) 大門正克『語る歴史、聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』岩波新書、2017年。
 - 7) 同上、第4章を参照。
 - 8) その他、林茂澤「私の韓青同」（『在日総合誌・抗路』3号、2016年12月）；「現代史メモランダム・第4回1965年」（『日本経済新聞』2022年5月2日、22面）を参照。
 - 9) 文京洙「済州島、三河島、そして朝鮮籍」李里花編『朝鮮籍とは何か——トランスナショナルの視点から』明石書店、2021年、156～172頁。
 - 10) 在日本朝鮮青年同盟（朝青）：総連傘下の青年組織。1947年3月に朝連の傘下団体として結成された「在日本朝鮮民主青年同盟」がその母体。母体は1949年に解散させられたが、朝鮮戦争の際に非公開組織として「祖国防衛在日朝鮮青年戦線」が再発足。1953年には民戦傘下の「在日朝鮮民主愛国青年同盟」（民愛青）としてその存在を公然化した。この民愛青は1955年民戦の解体、総連の結成にともない、55年8月に朝青が結成される。
 - 11) 朝鮮文化研究会（朝文研）：留学同（注13）の大学での表看板。
 - 12) 韓国文化研究会（韓文研）：韓学同（注17）の大学での表看板。
 - 13) 在日本朝鮮留学生同盟（留学同）：総連傘下の在日朝鮮人大学生の団体。1955年5月、総連の結成に際しての在日朝鮮人運動の路線転換に従って、1955年6月の第4回臨時大会で「在日本朝鮮留学生同盟」と改めた。
 - 14) 尹健次『在日の精神史』第2巻、岩波書店、2015年、173～184頁。
 - 15) 朝文研と韓文研の源流は、植民地朝鮮時代の「内地」留学生の同窓会に遡る。1919年、警保局保安課資料によると「近頃最も活動して居るのは早稲田・明治・中央・日本・慶応にして就中早稲田、明治は勢力がある」という状況だった。
 - 16) 在日韓国青年同盟（韓青同）：1945年の朝鮮建国促進青年同盟〔建青〕1950年に改編された在日大韓

青年団が前身。以下の韓学同のように、朴正熙の独裁政権に反対する立場を明確にし、1972年に民団から傘下団体認定を取り消される。

- 17) 在日韓国学生同盟（韓学同）：1945年に組織された在日朝鮮学生同盟は、祖国分断を前後して左右対立が激化し1949年5月の総会で分裂した後、右派は1950年在日韓国学生同盟を称し民団傘下組織になった。1961年の朴正熙の軍事クーデター後、軍事政権への反対姿勢を明確にした。1972年7月、民団は韓学同の傘下団体認定を取り消し事実上追放したが、韓学同は以後も韓国－民団社会の側に拠って立つ立場を堅持しつつ韓国軍事政権反対、本国学生運動支援連帯を標榜する活動を自立的に継続した。
- 18) 7・4南北共同声明：1972年7月4日に南北両政府が同時に発表した南北交流に関する共同宣言文。朴正熙政権は、在日社会を含む民衆の統一への熱望を利用し、国内政治の安定をはかって、長期執権の土台を作り上げようとした。
- 19) 維新体制：1972年10月17日、朴正熙が非常戒厳令を宣布して樹立した第4共和国。1979年10月26日に朴正熙が暗殺されることで解体する。
- 20) 本国志向とは、その内容が時期的にも、用いる団体によっても、あるいはそれを語る人の価値観や情緒によっても大きく異なってくる。例えば、一般的な意味として「在外同胞が本国に対して抱く郷愁のような情緒や民族ナショナリズムを表し、本国の現状から影響を受けたり、本国に対して政治・経済支援を求めたりする行為も含む」（盧琦雲「1950年代民団の「本国志向路線」」『在日朝鮮人史研究』37号、2007年、110頁）のであっても、本稿で語る1970年代の韓青同の本国志向とは、今の国の独裁に「反対する本国志向」である。
- 21) 林茂澤は自身の生い立ちの話を現在、小説に書く作業を行っている。
- 22) 韓国民主回復統一促進国民会議（韓民統）：1973年8月結成。初代議長に金大中、議長代行に金載華、常任顧問に裴東湖。
- 23) 金炳植事件：金炳植（1919～1999年）は、全羅南道生れの旧制第二高を出た総連の活動家。韓徳銖の姪の夫で55年総連結成後頭角を現し、1958年に朝鮮問題研究所所長に、1959年には総連人事部長になる。韓徳銖の指導権が確立する総連第8回大会（1967年）以後、組織内の「学習組」「ふくろう部隊（青年同盟熱誠者組織）」を梃子に自身のライバルや批判者への監視や検閲、過酷な「総括」や「自己批判」を強いて組織の極端な硬直化が進む。金炳植は、こうした「宗派摘発運動」や組織内での金日成の神格化を推し進めて、1966年には副議長、1971年には第1副議長にまで昇りつめる。金炳植事件とは、1972年に韓徳銖との対立が表面化し、この対立に金日成が韓徳銖を支持したことで金炳植が失脚し北朝鮮に召喚されたことをさす。
- 24) 大韓民国中央情報部。1981年に国家安全企画部に改称し、現在の国家情報院につがれる。
- 25) 1946年の内務省調査では647,006人（文京洙『在日朝鮮人問題の起源』クレイン、2007年、65頁の表を参照）。
- 26) 日立就職差別裁判：1970年、日立の入社試験において氏名の欄に通名を記し、本籍地に現住所を記した在日朝鮮人2世の朴鍾碩（当時19歳）が、「嘘をついた」という理由で採用を取り消される。朴鍾碩はそのことを不服として日立を相手に提訴し、4年に渡る法廷内外での運動で勝利した。
- 27) 民族差別と闘う連絡協議会（民闘連）：朴鍾碩の日立就職差別を糾す運動にかかわった人々によって1974年に結成された協議会。①在日韓国・朝鮮人の生活現実を踏まえて民族差別と闘う実践をする、②在日韓国・朝鮮人の民族差別と闘う各地の実践を強化するために交流の場を保障する、③在日韓国・朝鮮人と日本人が共闘していくことという「三原則」があり、会員、会費などはなく、年に一度自主的な地域活動の実践を持ち寄る全国交流集会を開催した。
- 28) 李承晩は1948年に大韓民国の初代大統領に就任した後、1952年の抜粋改憲、1954年の四捨五入改憲を押し付けながら独裁を続けていたが、1960年春に学生たちの主導した4・19革命でハワイに亡命した。
- 29) 鄭榮桓の研究論文に習い、国籍欄表記の推移を整理しておく。まず「選挙権の適用を受けざる者の選挙権及び被選挙権は当分の間停止」という「戸籍条項」（1945年12月）を受けて1947年5月に最

- 後の勅令として公布された「外国人登録令」により、日本に定住していた在日には一斉に国籍欄が設けられた。これが「朝鮮」国籍の始まりである。1947年当時598,507人。その後、1950年に朝鮮籍が467,470人、韓国籍が77,433人で、朝鮮籍が全体544,903人の85%。1960年には朝鮮籍が401,959人、韓国籍が179,298人で、朝鮮籍が全体の69%。1970年に朝鮮籍が282,813人、韓国籍が331,389人で、それぞれ4.6割と5.3割に変わる。(鄭栄桓「在日朝鮮人の「国籍」と朝鮮戦争(1947～1952)——「朝鮮籍」は以下にして生まれたか』『PRIME』40巻、明治学院大学機関リポジトリ、2017年、36頁。)
- 30) 前掲、文京洙「済州島、三河島、そして朝鮮籍」。
- 31) 1948年8月15日に樹立した大韓民国政府は、東京に韓国駐日代表部を設置するとともに、1949年11月24日に在外国民登録法を公布した。駐日代表部と在日大韓民国居留民団(民団)は、登録しなければ「完全な独立国民としてその法的地位と権利を一切喪失する」と呼びかけた。(前掲、鄭栄桓「在日朝鮮人の「国籍」と朝鮮戦争(1947～1952)」42頁。)
- 32) 丁章は、1968年京都市生まれの在日三世。父は朝鮮籍で母は韓国籍という、分断中の朝鮮半島では事例がないケース。結婚届はむろん日本の役所しか提出できず、息子である丁章の出生届も日本の役所に届け出ただけで在日外国人、そして当時の父系血統主義の所以で朝鮮籍つまり「事実上の「無国籍」」となったと彼はいう。(丁章「なぜ無国籍の「朝鮮」籍を生きるのか?」前掲、李里花編『朝鮮籍とは何か』177頁。)
- 33) 在日二世青年たちの就職の困難さについては様々な証言が存在する。前掲、尹健次「特集・尹健次『思想体験の交錯』を読む インタビュー「私の思想体験」」；金石範「在日朝鮮青年の人間宣言——帰化とアイデンティティ」前掲『在日の思想』など。
- 34) 金萬有：1914～2005年、済州島出身。1936年に渡日し、1941年に東京医学専門学校卒。1942年同郷人の資金援助により貧民街・荒川涙橋に金本医院開業。1945年に在日本朝鮮人連盟入会。1953年に「朝日親善、民主的医療センター、社会福祉」の三大精神を掲げる西新井病院を創立。
- 35) 『月刊朝鮮資料』。朝鮮問題研究所で1957年より出していた『朝鮮問題研究』とは別に1961年2月より刊行したもの。『朝鮮問題研究』が刊行されなくなった1968年以降、朝鮮問題研究所の定期的な日本語刊行物としては唯一のものとなった。1999年12月号をもって休刊状態。
- 36) 鄭章淵・文京洙『現代韓国への視点』大月書店、1990年。
- 37) 前掲、文京洙「済州島、三河島、そして朝鮮籍」。
- 38) 食糧管理法：戦時下に食料供給の安定を目的に1942年に制定され、1995年11月に廃止される。
- 39) 録音テープ事件：1960年4月革命と1961年の軍事クーデタに対する評価をめぐって、民団社会は、軍事政権を全面的に支持する民団中央派と、これに批判的な民団有志懇談会(有志懇)をはじめとする民団民主勢力派に二分された。1971年、団長を選出する民団中央大会を前に開かれた中央委員会に金在権公使(当時、韓国中央情報部幹部)が来賓として参加した。彼は、祝辞のなかで、民主勢力派の兪候補の参謀格の人物が東京帝国ホテルで総連の最高幹部と会い、大韓民国を転覆するための陰謀を画策しているという対話を録音したテープがあると公言した。大使館と民団中央側は、某人物とは有志懇リーダーの裴東湖であるとし、兪候補を支持しないよう露骨な選挙干渉を行った。結果、兪候補は落選し、大使館側が推す李禧元が中央団長に当選した。
- 40) 『スープとイデオロギー』：2022年6月に上映した梁英姫監督のドキュメンタリー映画。
- 41) 金明俊監督の2006年映画『ウリハッキョ』を参照。
- 42) 藤島宇内・宮田節子・加藤卓造・木元賢輔・梶村秀樹・高田保夫・小沢有作『ドキュメント・朝鮮人——日本現代史の暗い影』日本図書新聞出版社、1965年、序文。
- 43) 宮田浩人「在日朝鮮人の顔と顔」『三千里』8号、1976年。